



教職大学院 Newsletter No. 69

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.2.14

「省察」を深める実践研究

九州大学大学院人間環境学研究院 教授 田上 哲

長崎大学において昨（2014）年11月に開催されたウンドテーブルに、福井大学特命助教の藤井佑介氏から誘いを受け、ファシリテーターとして参加しました。

2001年から始まった実践研究福井ラウンドテーブルについては、比較的初期の頃に一度参加したことがあります。今回の長崎ラウンドで、実践者の方々の報告を小グループで時間をかけて聴き合うことが、私自身にとって大変豊かな「省察」になることを改めて感じました。

私は、社会科の初志をつらぬく会（別称：個を育てる教師のつどい、以下、初志の会）という民間教育研究団体に関与しています。初志の会の研究集会では、授業の実践記録を共同でかなり長い時間をかけて読み込みます。夏の全国研究集会では一つの授業実践の提案（授業記録ならびに子どもに関する資料）をもとに、2日間をかけてじっくりと読み込み協議しています。

初志の会の取り組みは、福井大学のラウンドテーブルと似ているところもあります。一つの実践を共同で深く掘り下げていくということを通して、なんらかの即時的な成果やすぐに役立つものを求めるのではなく、それに参加する者が自己の教育に対する見方や構えを見直し「省察」することを目指している点です。

実践は一回性の固有で個人的なものです。その固有で個人的な実践に肉薄し、自己の「省察」を通して教育の普遍に触れることが期待されます。そのことが一人ひとりの人間としての自己変革の足がかりとなります。

一方少し異なるところは、報告者の数と報告に用いられる資料によるものです。福井大学のラウンドテーブルで使用される資料には、形式として定式化されたものはないようです。複数の報告者がそれぞれの裁量で、様々な資料やツールを用いて報告を行ないます。長崎ラウンドにおける私のテーブルでは、実践を支える理念や全体構造を示した紙媒体の資料による報告とパワーポイントによる提示と実践記録による報告がありました。

どのような資料をどう用意するか、それを実践者自身が口頭でどのように報告していくか、そこにその報告者自身のなにごとかが表れます。その点も含めて、

テーブルでは報告者の個人的なものにより焦点が当てられた聴き合いが生じることになります。言わば、ダイレクトに実践者である報告者そのものが検討の対象になり、報告者自身と参加者の「省察」を促すことになります。

それに対して、初志の会の研究集会の分科会では提案者は一人で、そこで用いられる資料にはある一定の形式があります。授業記録とカルテや座席表を中心とした子どもに関する資料です。授業記録は、授業を可能な限り逐語的に書き起したものであり一人ひとりの子どもが判別できるものです。そこには子ども一人ひとりが独立した人間として現れます。

また座席表やカルテには、提案者自身が子どもをどうとらえているかが表れます。したがって、検討の場では、実践者自身は少し後景に退いて、提案者だけでなく子どもたちの一人ひとりに焦点があたります。提案者と参加者一人ひとりの子どもへの人間理解についての交流が「省察」を促すこととなります。

ここまで「省察」という言葉を何も定義せずに使ってきました。省察は教師教育の分野においては今や流行の言葉でその頻繁な使用には少し違和感を覚えています。私は、「省察」は本質的に個人的なものであり、自己に矛盾を見出し、本来自己否定を伴うものであると考えています。また、「省察」することができる人間は、仲間やコミュニティを頭から否定するものではありませんが、安寧秩序を重視して集団のなかで自分を出さずにマジョリティに合わせるよりも、ひとりぼっちであることも厭いません。抽象的な仲間やコミュニティが先にありそれが「省察」を支えるというよりも、一人ひとりが「省察」していく過程で、本来の仲間やコミュニティが機能すると考えています。

そのような「省察」が成立するかどうかは、「ものごとの本質をとらえる」という言葉の元々の意味で、一人ひとりが「穿（うが）った見方」ができるのか、そしてそれをお互いに受けとめ深めることができるのかにかかっています。

これからも実践研究福井ラウンドテーブルが、一人ひとりの参加者のそういった意味での「省察」の手がかりと足がかりになるものであることを期待しています。

冬の研究報告（海外編）中国訪問調査報告

中国の教師教育を考える



上海師範大学の訪問調査報告

福井大学教職大学院 教授 森 透

去る2014年12月2日（月）から25日（木）までの3泊4日、上海師範大学等を訪問することができた。訪問団一行は、教職大学院からは松木健一、小林真由美、森透の3名の先生方、教育地域科学部からは濱口由美先生、附属小学校の大橋武史先生、及び学部の美術コースの学生5名（4年生の安本晃央君、2年生の西本昂生君・山田夏乃さん・三好愛さん・中村葉さん）、合計10名であった。以下に全体の概要を報告したい。

今回の訪問の目的と特徴

第1の目的は2月28日（土）に福井大学で開催さ

れるラウンドテーブルで、上海師範大学の教師教育の報告をお願いすることであった。今回の訪問では報告者を確定することができなかったが、1日目の夜の陸書記との懇談では、訪日を前向きに検討していただける可能性を感じることができた。最終的には、ラウンドの準備の関係もあり、1月10日までに訪問団の名簿確定をお願いして、帰国した。

第2の目的は濱口先生や大橋先生、及び美術コースの学生5名が上海師範大学第1附属小の子どもたちに美術の授業を行うというチャレンジを行ったことである。福井大学附属小の大橋先生のクラスの子

【スケジュール】

12月22日(月) 小松—上海

- * 中国東方航空0558便(MU0558)13時30分小松空港発（30分ほど遅れる）→15時すぎ上海・浦東空港着／
- * 夕食は美術グループはゲストハウス食堂にて。教職大学院の3名は構内レストランで陸書記・夏教授（国際交流処）・劉特任教授と会談。

12月23日(火)

- * 上海師範大学第1附属小で美術の学生が美術授業の実践、その後美術の授業参観と濱口先生の授業提案など（一日）。
- * 午後からは教職大学院3名は別行動→上海市桶浦教育国際交流服務中心の祝玲氏と会談。16時過ぎに第1附属小に合流する。
- * 大学まで歩き、理数学院を訪問し張院長と会談。
- * 夕食は構内のレストランで懇親会。

12月24日（水）

- * 大学から徒歩で約30分、上海実験学校を訪問。授業参観。
- * 11時には送迎バスで約1時間、上海師範大学天華学院を訪問。教員食堂で昼食。（通訳は日本語科教員）。キャンパス見学（美術の授業参観）
- * 14時—16時 交流会<天華学院全体の紹介／師範系専攻の紹介／日本語専攻の紹介／福井大学の紹介／自由発言・交流>
- * 天華学院の専用車で観光へ。
- * 夕食は中華レストランで懇親会

12月25日(木) 上海—小松

- * 朝6時30分 ゲストハウス出発

どもたちの絵画を上海に持参し、それを上海の子どもたちが見て何を感じるか。非常に興味深い授業実践であった。詳しくは各先生方からの報告があると思うが、結論から言うと、美術は言葉の壁を超えて共感できること、そしてお互いにコミュニケーションができるという実感を持つことができたことである。

第3に報告したいことは、今回の訪問を通して、新たな学校を知ることができたことである。2日目の午前中の上海実験学校と午後の上海師範大学天華学院である。上海実験学校は授業料が高いのでかなり裕福な家庭の子どもたちが入学していたが、中には福井市出身の男の子もいて少し話すことができ

た。子どもたちはクリスマスを祝したプレゼントの交換会で非常に盛り上がっていた。午後は上海師範大学とは独立した組織の天華学院（2006年創立）を訪問することができたことである。学長はじめ重要な役職は女性が担っており、女性主体の大学という印象を受けた。総合大学であるが教員養成にも力を入れており、学術協定の締結を強く期待されていたので、今後の課題としておきたい。

最後に、2月28日の福井大学でのラウンド企画を通して、中国の教師教育の実際を学び、日本の教師教育との比較検討を通してお互いに教師教育の展望を探りたいと考えている。

中国の授業を参観して

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

昨年度の3月に上海を訪れ、今回は二度目の訪問となる。前回はその教授型の授業に疑問を抱き、「日本はいいなあ」と再確認することが多かったが、再度、訪れたことで「本当に日本はこれでもいいのだろうか」と逆に日本の教育に、新たな疑問を抱くことになった。

昨年度訪れた3月には温かで気づかなかったが、今回驚いたのは、小学校から大学まで教室には一つも暖房がないということ。上着を控え室においてしまった私たちは、凍えきってしまった。それが当たり前になっているからだろうが、彼らはそんなことに少しもひるまない。むしろ冷たい空気の中で、よりいっそう集中力を研ぎ澄まして、一生懸命、学ぼうとしている。

今回は、美術科の学生と同行したので、授業も美術が中心に参観した。折り紙を折って、そこに切り込みを入れることできれいな模様を作る授業。先生はいつものように、OHCを駆使してスクリーンに映し出し、やり方を伝授する。四つに折った正方形までは一人も違う折り方をする子がいない。切り込みの入れ方まで説明する。半分の子は先生の言ったとおりに切り込む。自分なりのささやかなオリジナリティーを入れて、切り方を変える子もいる。先生の言ったとおりであろうが、自分で好きに切ったのであろうが、この教材の特徴は「失敗しない」ことだ。そして誰も「できないことがない」。どの子ども夢中になって自分の作品を作る。そして広げてみる瞬間には、目をきらきらさせて鮮やかな模様が出てくることに胸躍らせる。できた模様をうちわに貼る。私はこの瞬間に「ここに貼ることはなかなかむずかしいかも」と子どもたちの「できないことに挑戦してがんばる姿」に期待したが、次の瞬間、あっという間に驚いた。折り紙はシールになっていたのである。誰一人も失敗することなくシールをはがしてうちわ

に貼り付ける。全員の子どもたちに達成感がみなぎっていた。前回の訪問の際の授業が蘇り「中国らしいなあ」と半ば呆れた。

次の授業は「吹画」。黒板には①滴墨②吹墨③点吐④背景と書かれて、日本人の私でも授業内容は想像がつく。ストローで墨を吹き色紙に木の幹を描く。そこに指で木の実を描き足す。これもまた、誰もできないはずがない。子どもたちは嬉しそうにストローで墨を色紙に吹きかけ、机の前に用意された手に取りやすい何色かの絵の具を指につけ、色紙に指で押していく。木の実の色も限定されているので、だいたいみんながよく似た絵になる。相変わらずの型どおりの流れでどの子どもたちも、色紙を汚すこともなく、美しくよく似た木が仕上がった。



大学の一般教養の美術の授業も参観した。大学にも暖房はない。学生たちはコートを羽織って信じられないほど寒い講義室で熱心に学ぶ。粘土で何か製作しそれに色づけしてプレゼントするという内容だっ

た。想像通り、彼らの作品は画一的だった。丁寧に精巧なかわいいキャラクター人形が提示される。どの作品もとても巧妙に出来ているが、よく似ていた。「福井大学の学生は、粘土を与えられてみんながみんな、こんな作品を作らないなあ」とつぶやいた。しかし、隣にいた濱口先生は「福大の学生なら作らないというより作れないよ」と一言。濱口先生によれば、技法を学ぶことによって彼らは確実にこうした技術を身につけ、こんなに美しい作品を仕上げる事が出来る。確かに日本の学生ならもっと個性豊かに、もっとクリエイティブに作り上げるだろうが、もっと雑でもっといい加減な作品もできるだろう。画一的なことが必ずしも悪くはない、基礎の技法をしっかりと身につけてから創造性を生み出すことも一つのやり方だと濱口先生はおっしゃった。

今回は、アメリカンスクールのような小学校にも訪れた。世界各国の子どもたちが集まっており日本人もいる。なんと、昨年まで福井の社北小学校に在籍していた男の子がいて、ローカルな話に花が咲いた。「中国語がわからなくて初めはつらかった」という彼もたった1年で中国の友達と流暢に話をしていった。そこは中国の学校と全く雰囲気が違う。クリスマス集会を行っていたが、子どもたちは整列できずざわざわとして、先生の指示がなかなか通らない。日本でよく見る光景に思わず苦笑いであった。松木先生は「発達障害の子どもが4人はいるよ」とおっしゃられた。中国の授業の中では、画一的な流れの中に、おそらく存在していたであろう発達障害の子どもたちも見抜けなかった。前回の訪問の際

にここに訪れたなら、これが本当の子どもの姿だと感じただろう。しかしながら「わがまま!!」第一印象はこの一言だった。凍てつく寒さの中、一言の文句も言わず、一心不乱に目を輝かせて先生の言われたことをこなす中国の子どもたち。その姿が思い出されて、「これでいいのか」と問い返した。一人一人の個に応じて、伸びる力を引き出し、生きる力を育むことは、どこかで子どものわがままの芽も伸ばしていないか。

一クラスが80人近くいる場合もあるという中国では、画一的な授業もやむを得ない。その中でも達成感を得られるよう、子どもにとって失敗のない準備をし、きれいに流していく。素直にそこに喜びを見出し、熱心に学びに向かう姿は美しく感じられた。附属小学校の子どもたちが描いた運動会の絵を鑑賞し「日本の子は想像力がすばらしい」「自分が絵の中に入ったような気がする」「私たちはいろんなことを頭の中で考えても絵に出来ないが、日本の子はそれが出来る」と感想を述べた中国の子どもたち。クリエイティブさに欠ける今の中国の教育の現状に対する飢えを感じる。飢えるからこそ求めるのでは・・・日本の子どもたちは、自分たちの国の豊かさをわかっていない。暖かい教室、中国の半分以下の人数の児童生徒、個性を引き出し自由な発想を大事にする教育、そこから生まれるものが単に「わがまま」だけであってよいはずがない。ここから何をどう修正すべきなのか・・・もう暖房無しには戻れない日本の現状に、考え込んでしまった今回の訪問だった。

研究集会・公開研究会の報告

◆ 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校

公開研究会「学校・地域・家庭のつながりの中で育つ ～一人一人が活動と参加の質を高める～」

福井大学教職大学院 准教授 天方 和也

11月28日(金)に附属特別支援学校の公開研究会が開催されました。参加者数は来賓、県外附属特別支援学校・県内外の公立特別支援学校・県内小中学校の教員、保護者、学生、及び福井大学教職大学院スタッフ等、約230名でした。日程に沿って内容を紹介します。

○授業公開 10:00～11:30

小学部 「全学年：明新小学校4年生と2回目の交流をしよう」

中学部 「衣食グループ：オリジナルの布エコバッグを作ろう」「環境グループ：花壇の柵を作ろう」「工芸グループ：エコたわしを作ってプレゼントの準備をしよう」

高等部 「織り班：お客さんの好きな小物を作ろう」「紙と刷り班：カレンダーを作ろう」「畑班：秋・冬野菜を収穫しよう」「焼き物班：お客さんが喜ぶ焼き物作品を作ろう」

○授業振り返り・校舎見学 11:30～12:00

授業公開について、各授業場所で質問や意見交換を行いました。併せて1年間に及ぶ増改築が終了し、リニューアルされた校舎の見学時間としました。

○全体会 13:00～13:40

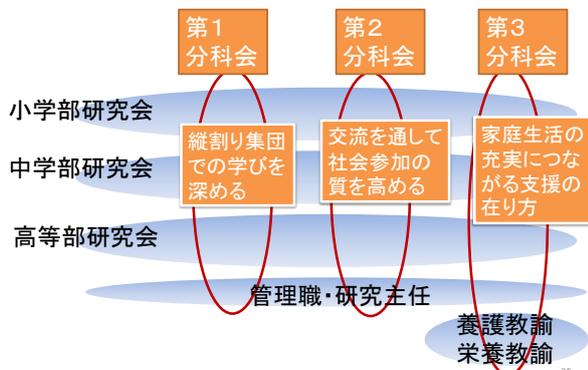
研究テーマ 学校・地域・家庭のつながりの中で育つ～一人一人が活動と参加の質を高める～【3/4年次】

本研究は「万人のための教育」を目指すサラマンカ声明、「ICF(国際生活機能分類)」、「キャリア教育」や「インクルーシブ教育」などの概念を背景としています。その具体的な内容・目標は「一人一人がかげがえのない存在である」という前提に立ち、「個々の学びの意味を時間的空間的意味においてとらえ方向づけることを支援する」としたキャリア教育の本質的な考え方や、ICFの理念を基盤にすべての児童生徒の自立及び社会参加を一層推進する教育の役割と社会的理解及び支援機能全体の充実及び「だれもが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」や「同じ場で共に学ぶことを追求し、地域での生活基盤を形成」することを実現するための、インクルーシブ教育システムの構築です。

研究を具体的に進めていくにあたり3つの分科会を設けました。テーマと研究体制は以下のとおりです。

- 第1分科会：縦割り集団での学びを深める
- 第2分科会：交流を通して社会参加の質を高める
- 第3分科会：家庭生活の充実につながる支援の在り方

縦割り研究会(分科会)と学部研究会



各分科会は、各学部の教師がそれぞれ所属する縦割りのグループ編制です。学校内の教師がつながり

合って他学部の活動を理解し、共に活動内容や支援について話し合うことで、教師同士のネットワークが形成され、実践の質も高まっていくからです。教職大学院の「実践コミュニティ」の一環であるクロスセッションと共通する意図と内容です。

以上の研究概要に対し「特別支援学校には他の学校以上に、様々な学習と機会の場合や、社会に出てから必要とされる力を育成することが求められており、いろいろな試みがなされているが、まだ体系化されていないので、今後の一つのモデルとなることを期待している」という趣旨の助言をいただきました。

○分科会 13:50～16:30

第1分科会は、「全校縦割り班活動(レインボータイム)」から「各学部の活動」に広げた教師の「しかけ」の有効性と、「他学部との活動」の可能性について協議しました。この中で、縦割り集団のメリットやデメリットについての質問や意見、教師のしかけの中の「ペア形成」の重要性に関する意見交換などが行われました。最後に「全校縦割り集団での活動は全国的にも貴重で大胆な取組である」、「集団における学びを追究していくとユニバーサルデザインや交流及び共同学習の要素に使える」、「縦割りでの学びや教師のしかけによる子どもの成長の評価が難しい」などの助言をいただきました。

第2分科会は、各学部の具体的取組とそれによる子どもの育ちや見えてきた課題について報告を行い、それをもとに、社会参加を高める交流について協議しました。この中で、県内外の特別支援学校の学校間・居住地校交流の実践の報告や、交流校の教師からのビデオレター、及び障害児の「きょうだい」支援の重要性などについて意見が交わされました。最後に「交流する双方が楽しめる内容や工夫が大切である」、「交流及び共同学習とは相互育ちである」、「障害とは生きにくさであるということを社会に理解してもらうことが必要である」、「交流における活動の質の高まりを明確化する必要がある」などの助言をいただきました。

第3分科会は、家庭との連携や校内の体制など子どもたちの家庭生活の充実につながる支援について学校全体の具体的な取組や個別の取組を紹介した後、協議・意見交換しました。この中で、「保健指導や食に関する指導では、様々な立場の人の連携や評価が必要である」、「健康相談データベースに興味があるので将来的に利用できるものにしてほしい」、「家庭との連携においては保護者の自己肯定感や教師の内面の葛藤を大切にすると良い」、「職業人としての教師と保護者の子どもへの視点の違いを意識する」、「子どもも本人も異年齢である保護者集団の中における育ちや自己肯定感が大切である」という意見や助言をいただきました。

◆ 福井大学教育地域科学部附属小学校

第40回教育研究集会「聴き合い、つながり合って、 学びを深める授業をつくる」

教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校 高田 侑来

インターンシップに週3日通う私たちストレートマスターの院生は、誰しもが日々の生活に慣れが生じ、目的を見失いモチベーションが下がる時があります。丁度この頃の私がそうでした。沈んだ気持ちをなんとかしたい。何かを得たい、刺激がほしい。半ば絶望のような思いで研究集会に参加しました。今回は2つの授業を参観し、分科会にも参加させていただきました。中でも印象に残る、1年生の造形の授業を中心に報告させていただきます。

授業の題材名は「ころもかぼか「はあとふるえほん」～はあとぴったりいろとかたち～」。本時はその題材名にある、「はあとふる えほん」づくりをしました。具体的には紙を自由に切り貼りし、色を塗ることで児童一人一人の思い・気持ち（はあと）を表現する、そして交流するという活動です。ポイントは「自分の心と対話しながら」ということ。ただ闇雲に手を動かすのではなく、「今」自分の中にある思いを見つめ、それを各々形にすることを重視した授業展開でした。

参観してまず驚いたのは、児童が自分のことに集中して活動できていたことです。普段私は中学生を相手にしているため、小学1年生の様子がわかりません。想像ですと集中力が続かず、すぐに騒がしくなってしまうものだと思っていました。しかし目の前の児童たちは一心不乱にはさみを動かしたり、絵の具を取り出し自由に色を塗っています。それを見て気づきました。児童がこのような姿を見せるのは、集中できる環境を授業者が整えているということ。例えば、児童の活動時間をたっぷりとるために、授業者が話したり指示を出す時間を出来るだけ短くする。また児童が集中しているときは無駄な声かけをせず、何をしようか迷っている子に手を差し伸べる。こうすることで児童たちは今何をやる時間かが理解できてさえいれば、はしゃぎまわらず真剣な表情を見せるのだということが分かりました。

こうして出来上がった作品たちはどれも個性的で、同じものが一つとありませんでした。それは授業者がしきりに、「お友達のまねっこはダメだよー。自分だよー。」と声掛けしていたことが少なからず影響していると思います。実際児童たちは他の人のことは気にせず、自分のやりたいようにしていました。これは教室全体に「自由」や「個性」が保障されているからだとは思いますが。日ごろから、自分を大切に、そしてそれを表現する素晴らしさを伝えているからこそだと感じました。

分科会は、いくつかの小グループに分かれて交流をしました。児童の様子と授業者の様子、この2つの視点を中心に振り返りをしました。大学生から県外からいらっしゃった先生方まで、幅広い交流ができたと思います。鋭い意見もたくさん出ましたが、時々笑いも出るような和やかな雰囲気でした。なにより、この授業を参観した全員が「何かを得よう」というオーラが感じられる、素敵な時間だったと思います。最後に授業者である先生のお話がありました。そこでは、1つの授業にかかる情熱を感じました。誰かが参観するから、ではなく、どんな状況であって1時間1時間が勝負。そのために多くの教材研究をし、情熱を注ぐ。このお話を聞いて、私の中で忘れかけていたものが呼ぶ起こされた気がしました。

12月5日、この日の附属小学校には「共に学び合おう」という雰囲気が学校全体に流れていました。もしかしたらこれが普段の様子なのかもしれません。ですが外部の人間である私にとって、それを肌で感じる事ができたことはとても貴重でした。そして「また明日もがんばろう！」前向きな気持ちで生まれました。

長い一日でしたが心も頭も鍛えられ、何より明日への活力を頂けた貴重な研究集会でした。附属小学校の先生方、本当にありがとうございました。

実践研究東京ラウンドテーブルに参加して

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

12月にして突然の大雪に見舞われた福井から逃げるようにして東京に到着。空の青さとハイヒールで颯爽と歩く女性の軽やかさに、だから福井は嫌な

んだとぶつぶつ言いつつ、二度目の東京ラウンドテーブルに参加した。昨年度は二日目だけの参加だったので、今回は一日目から、社会教育に携わる

方々の提案をいただき、地域コミュニティということについてじっくりと考える機会を得ることができた。

私が3つの提案をお聞きする中で、まず思ったことは、私自身が社会教育に関してこれまで全く無知であり、知ろうとしていなかったということである。ESDや国際理解といった今日的課題に向き合った研修を行う一方で、プロジェクトチームまで結成しながら公民館の充実を図ってきたという岡山市の中央公民館。学び合い講座の開催によって職員への学びの機会を確保するだけでなく、企画者の力量形成や協働を培ってきた大阪教育大学。そして最も身近であるはずの福井大学履修証明プログラム。こんなにも一生懸命に地域での学び合いに寄与する人たちの姿にこれまでなぜ目を向けることがなかったのだろう。とりわけ、福井大学と連携して研修を積み重ねている福井市の取組は、福井市教委熊野直彦氏の聴き手を魅了するすてきなプレゼン力とも相まって、私に大きな衝撃を与えた。コラボレーションホールのすぐそばに研究室のある私は、時々お集まりになる公民館の皆様の姿を見ながら、「私には関係ないこと」とどこかで思っていたに違いない。そうやって閉ざしてしまうことが地域のコミュニティづくりを阻んでいるのである。熊野氏の話をお聞きするとすぐ、その内容が教職大学院で行われている学びのスタイルと全く同じだということに気づいた。語り合い、振り返り、記録に残す。その探究のスタイルは学校でも地域でも大学でも変わらない。要はそこに学びたいという意欲があるなら、そ

のコミュニティは機会を設けるだけで自然とできあがる。しかしながら、その「機会を設ける」ということが大切である。公民館の果たす役割が「地域のコーディネータ」である一方、そのコーディネータのコーディネータの存在が組織化、継続化、活性化の鍵を握る。それが行政であり大学であろう。熊野氏が言われた時間軸としての継続性と、空間軸としての広がりという観点から考えると、この地域コミュニティを学校にもつなげていくことはできないか。一小学校一公民館という恵まれた環境にある福井市では最近では小学校だけでなく、中学生の地域貢献が進められている。地域の役に立って認められるという有用感が、地域を愛する気持ちに繋がり、やがては地域を担う気持ちを喚起する。学校教員である私の立場からこんな話をさせていただき、熱く楽しい時間が過ぎた。

翌日のラウンドテーブルでは、偶然にも神奈川で教員として勤務する昨年度の教職大学院修士と同一グループとなり、これまた彼の奮闘ぶりを聴くことができた。共に語り合いながら懐かしさを味わい、素敵な時間を過ごすことができた。

明るい日差しのさす東京から、雪で邪魔されキャリアバックを引くことさえできない福井に戻りながら、行きとちよっと変わって「この福井のために、あんなに一生懸命取り組んでいる人がいる」ということに胸打たれていた。私こそ、この地域を愛し貢献するために何を為すべきかもう一度考えねばと奮い立ち、ぜひ一度あの履修プログラムに参加したいなあと考えていた。

福井大学教職大学院 准教授 小林 和雄

今回の東京ラウンドテーブルは、学校教育ではなく、公民館や博物館、教育委員会の社会教育主事などの社会教育に関わる方との交流であり、福井大学の学生は参加しないということであった。私も初めての経験で話についていけるかとても不安であった。何かポスター発表をしてほしいと頼まれたが、社会教育を研究している方々に、「社会教育とは何か」すらよく知らない自分にできることを見いだせなかった。

そこで福井大学の教職大学院の学生が3年前から参加している美浜町役場の社会教育企画の一つである美浜はあとふる体験について紹介することにした。参加した学生が撮影した画像や動画、感想などをもとに地域の社会教育との連携によって、学生が

体験を通して様々な学びを深めていることを発信してきた。

また、グループでの実践の紹介でも、地域の大人の学びを支える多様な試みを聞くことができ、学校教育、社会教育と分野が違っていても、人を育てる、才能を引き出して、伸ばす自助への援助、学び続けるコミュニティの構築という視座にたてば、大きな違いはなく通底して流れているものがたくさんあった。とても参考になったラウンドテーブルであり、教師としての力量形成には欠かすことができない貴重な場である。まだ、参加したことがない教職大学院のスタッフは、次回必ず参加するようにしたい。

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

2014年12月6日(土)、7日(日)と明治大学で「実践研究 東京ラウンドテーブル」が開催されました。1日目は「コミュニティ学習支援コーディネーターの力量形成とその組織」というテーマで、3名のパネリストが地域や職場で取り組んでいる社

会教育職員の研修を紹介し、その後小グループで話し合いが行われました。

2日目はポスターセッションとラウンドテーブルがあり、私はポスターセッションで報告を、ラウン

ドテーブルでファシリテーターを務めました。ポスターセッションには顔なじみの公民館主事さんや初対面の方などたくさんの方が関心を寄せ聴きにきてくださいました。以前から知っている方は私の報告を聴き「そんなことをやっていたのね」と驚いておられ、既知であっても報告を通じた新たな関係性が築けたように思いました。

ラウンドテーブルでは「そうそうカフェ」という葬送の学び合いの場をコーディネートされている大竹さんの実践と、明治大学で子ども達との探求活動「登戸探求プロジェクト」を行っている石原さんの報告を聴く機会に恵まれました。大竹さんとは以前からの知り合いなのですが実践をじっくり聴くのは今回が初めてでした。大竹さんは葬送の世界では大変著名な方で、著書『葬儀の実用事典』をお持ちの方も多と思います。ご実績十分な大竹さんがご自分の専門性を真摯に問い直し、実用書を「葬送マニュアル」から「葬送ナラティブ」へ書き換えるこ

とを試みていらっしゃる姿は、今後私が自分の専門性について大きな壁（問い）にぶつかった時必ずや参照することになるだろうと思いました。明治大学の石原さんは「登戸探求プロジェクト」を単位取得が目的ではなく自分がやりたいからやっているのだそうです。社会人になってからも登戸探求プロジェクトを続けたいそうで、「1年やって2年目の目標ができ、2年やってまた3年目の課題ができた。だからきっと将来もやり続けると思うんです」と明るい笑顔でさりりと言っておられました。石原さんの「学び」のフレームの大きさに触れ、自分のフレームの小ささに気づきました。

実践を語ることで得ること・広がること・問い直せること・築けることは、同時に聴くことによっても起こるのだと改めて感じました。語る・聴くことによる学びのダイナミズムを経験し、次のラウンドテーブルがまた待ち遠しくなりました。次はいよいよ春の「実践研究 福井ラウンドテーブル」です。

冬の集中講座に参加して

スクールリーダー養成コース1年／勝山市立野向小学校 山田 啓子

教職大学院に入学した4月より、「つながり」「記録」「見取る」という言葉に反応するようになりました。それは、学校目標や研究授業でよく聞く言葉であり、自分自身も普段使ってきた言葉ですが、ここでは、自分が今まで捉えていた意味より、別の深いニュアンスが加わっているように聞こえてきたからです。ほんの小さな気付きですが、その3つのワードにアンテナをはり、教職大学院の学びをスタートすることにしました。

まず、視野の狭さや経験の乏しさはすぐには解消できないので、学校とは別の社会の方々の話を聞く機会を持ちたいと、6月のラウンドテーブルでは、ゾーンCの「コミュニティ」に参加しました。ここでは、まさに「つながり」や「記録」がテーマでした。公民館の広報誌の充実を図った活動報告や、新聞記者が地元と繋がって取り組んだ事例の発表を聞いたり、市民大学運営ボランティアをされている横浜市からの参加者の話を伺ったりして、社会におけるスケールの大きな「つながり」や「記録」について知りました。また7月の集中講座では「障害児心理学ものがたりー小さな秩序系の記録ー」という本を選びレポートを書きました。本には、児童の行動の小さな変化を見取り、次の教材教具の工夫をする支援者の粘り強い取り組みが書かれていました。2回目の夏の集中講座では、「コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践」を読み、コミュニティ・オブ・プラクティスのよ

うな、主体的で継続する勉強会をつくり、そのコーディネーターを実際に体験してみたいと思うようになりました。そして勝山市の通級指導担当者を中心に特別支援教育について学ぶ少人数の会をつくり実践してみると、あらためて「つながり」に支えられている自分自身を実感するようになりました。

今回の冬の集中講座では、以前「見取り」について校内研修で追及されておられた先生と再びグループが一緒になり、「見取り」についての理解できていないところを質問させていただき、グループで話し合ったり、教職大学院の先生から教わったりすることができました。また、3日目は、教育研究所ミドルステップアップ研修の方とのクロスセッションがあり、生徒の資格取得に熱心に取り組んでおられる高校の先生や、高校の分校で教育相談を含めた生徒指導をされている先生の事例を聞くことができました。高校に訪問することがほとんどない私にとって、とても貴重な話を聞く機会となりました。

こうして振り返ると、新たな「つながり」や、継続する「つながり」に刺激と活力を貰ってきたことに気付きます。すぐろくに例えるとゴールはまだまだ先ですが、「つながり」を線でつないで少しずつ進んでいるように思います。また「記録」の価値を実感したので、今後は苦手意識を乗り越えて、面倒がらずに書いていきたいと思っています。

スクールリーダー養成コース2年／勝山市立荒土小学校 玉村 伸一

12月24日から、長期実践報告をまとめるための冬期集中講座が始まった。今年は修了を控えているため、私は長期実践報告を完成させられるかどうか不安になりながらこの講座を迎えた。同じM2の院生の方を見つけると、私は必ず「長期実践報告、どこまでできた?」、「私は〇〇ページまでできた」と合い言葉のように話しかけていた。そして、「このような実践を書いているよ」、「〇〇ページまでできたけど先が進まない」などと状況話し、「さあ、頑張ろう」と励まし合いながら、長期実践報告の作成のためパソコンに向かった。

まず私は、昨年度からまとめてきた実践に付け加えて、今年度の取り組みをまとめることにした。昨年度は、私がこれまでの教師人生の中で、「いじめ」、「学級崩壊」、「不登校」などの様々な問題乗り越えてきた実践と昨年担任したクラスの子どもの絆作りの実践をまとめた。そして「こんな子ども達と出会ったな」、「子ども達と様々なこと話したな」と当時を思い出しながら作成した。

今年度は、研究主任としての役割をいただいたので、学校の授業改革に取り組んできた内容をまとめることにした。そして、「あの先生と算数の授業について話し合ったな」、「あの研究授業はよかったな」と振り返りながら、荒土小学校の教員と一緒に研究を進めてきたことを書き出した。書き始めは、研究主任として何を考え、どういう研究会を開いてきたかなどをまとめた。それとともに、荒土小の教員や教職大学院の前園先生をはじめとした担当の先生方と一緒に進めてきた研究授業の実践の数々を、自分が悩んだことや学んだことともに書き綴っていった。しかし、文章を書くのが苦手な私は、なかなか進まなくて1日に2、3ページしか進まないことがあった。しかも、実践の事実は書けるが、私がそこから何を学び、どのような意味があったのかを考えると悩んでしまい全く進めなくなった。そのような時、担当の前園先生やグループで一緒になった森先生からいただいたアドバイスが、私の筆を進めさ

せてくれた。具体的には、前園先生からは、「教職大学院の入学前と現在の教師像の変化を考えてみてはどうか」、森先生からは「どんな実践でも土台として授業作りがあるので考えてみてはどうか」とのアドバイスをいただいた。さらに、私が教職大学院に入学して何を学んできたのかも問われた。

私は、これらのアドバイスをもとに、もう一度自分の実践について考えてみることにした。すると「いじめ」や「学級崩壊」「不登校」などの問題乗り越えた土台に「子どもたちで学び合う授業作り」があったことが分かった。また、様々な問題を解決する度に私の教師像も変化してきていることも見えてきた。

さらに研究主任としての今年の実践にも共通したものがあるのではないかと考えた。そのうちに「協働」と「コーディネート」というキーワードにたどり着いた。この2つのキーワードは、教職大学院に入学し、「コミュニティ・オブ・プラクティス」や「学習する組織」、卒業された先生方の長期実践報告を読み、合同カンファレンスで話し合ってきたことから意識するようになった言葉であった。私は、荒土小学校の教員集団が「チーム荒土」になるために研究主任として、研究会や模擬授業（授業者が児童役の教員に向かって授業を行う）を計画し、日頃の会話などを通して研究が進むように考えて実践を積み重ねてきていたが、集中講座において、この実践を「荒土小の教員が「協働」の集団になれるように、自分がコーディネーターとして関わってきた過程」と捉え直すことができた。

このように冬期集中講座の6日間は、自分に向き合い、悩みながらの苦しい期間であった。しかし、これまでの教師人生の中でこれほど教師としての自分を見つめ直した時間はなかった。そして、これからも続く教師人生の展望を考えることができ、私にとって価値ある時間として過ごせたことに喜びを感じている。

教職専門性開発コース2年 西川 文野

この冬、12月24日、25日、26日（前日程）、1月5日、6日、7日（後日程）の6日間、冬季集中講義に参加した。修士論文に代わる長期実践研究報告書を作成するためである。

前日程では、12月初旬に行わせていただいた算数の全12時間の授業実践を振り返った。

教職大学院に入るまで、私は自分の授業を振り返る機会などめったになかった。しかし、こうして2年間を経て、少しずつ自分の実践を振り返ることも自

然なことになりつつある。それは、振り返ることで、新たな気づきにつながるということに気付いたことが大きいからだろう。今回の授業実践では日々の教材研究等に追われ、記録を書く時間のみになってしまっていた。つまり、記録から振り返るという時間が十分にとることができなかつたという反省が大きく、次に活かすという作業を行うことができていなかった。そこで、今回の冬季集中講座の前半で、授業実践の記録から次の実践で活かすことができるように振り返る時間を取った。

自分自身の実践を振り返ることは、次の実践への糧にもなる。一回一回の実践で終わるのではなく、振り返ることで更なる課題に気付くことができる。そして、実践し振り返り、次の実践で生かしていくというサイクルを繰り返していくことで、自分自身が学び続け、成長することができるのである。

後日程では、教職大学院に入学してからの約2年間で客観的に振り返る作業を行った。日々書いていた記録を振り返る中で省察という壁にぶつかることが多かった。「省察とは何か？」について悩んでいた私は、グループの中で相談した。すると、「記録に書かれているものは1つの事象としての点であることが多い。それを線で結び、つなげる作業であ

る」と教えていただいた。確かに、私の記録はその日その日の記録であり、点であることが多い。そのために文章としてまとめると繋がっていない部分も含まれている。しかし、その繋がっていない部分の間には自分の悩みや反省、どうしようと思ったかなどの葛藤といった非常に重要な私の思いが存在しているのである。そこで、今回は記録を線でつなげる作業を行っていった。

今回もこの長期実践研究報告書を書くにあたり、「省察する」ことで、記録を通しての自分の経験を捉え直すことができた。残りの少ない時間で、長期実践研究報告書を更にいいものにしたいことができるように、日々読み直していきたい。

平成26年度日本教職大学院協会研究大会に参加して

福井大学教職大学院 准教授 稲垣 良介

小中学校の学習指導要領には、プール施設が無い学校、つまり水泳の授業を実施しない学校においても“水泳の心得”については必ず取り上げることとされています。日本ではプール普及率は著しく高い反面、水難事故が突出して高いという現実があります。このところ、(学部の)学生と“水泳の心得”について議論しています。“水泳の心得”について、突き詰めて考えると、さまざまな課題が見えてきます。本題に入る前に少し長くなりますが、一つだけ例を挙げます。“水泳”をどのように捉えるかで“心得”の内容は変わります。水難事故を場所別に見ると河川や海等が圧倒的に高いにも関わらず、学校体育の水泳は(長方形の豆腐のような形をした)プールの水面を移動する泳法を指すことが多く、自然水でのそれはあまり取り上げられません。水難事故は発生件数に対する死亡率が他の事故に比べて著しく高いことを考えると、未然防止に資する能力をいかに小中学校の段階で身につけさせるかが重要です。“水泳”を自然水での遊泳を含めてその“心得”と解釈するのか、プール水面の移動を念頭に置くのかでは授業の内容が異なります。また、知識を注入するだけではさまざまな状況に対応することが出来ないため、判断力などの未然防止能力を育成する必要があると考えられます。このように学部生と議論し模擬授業や教育実習で教壇に立たせていますが、力量形成にどれだけ寄与しているかは？です。単発の実践では自ずと限界があります。

12月6、7日に日本教職大学院協会研究大会に参加させていただきました。2日目のパネルディスカッションでは、4名のパネリストの方がそれぞれ

の立場から教職大学院における学修の成果と課題—修了生の質保証のための取り組み—のテーマに沿って話されました。福井県福井市至民中学校長淵本幸嗣氏のお話が最も印象的であり、中でもストレートマスター養成に対する課題として挙げられたことにとても共感するところがありました。

以下、淵本氏の要旨について、研究大会の配布資料から抜粋させていただきます。

「至民中学校のストレートマスターの院生には、採用前なので、できるだけ学校で授業を積み立てている。また、経験豊かな専門職の仲間の授業を思う存分見たり、職員会議、教科会、学年会等にも参加させたりして、厳しい現実への対応も教えている。

このようなことで、院生は、探求的で知的な学びを創る中で、意欲の大切さや基礎基本の大切さも学んでいく。授業力、生徒指導力等でまだまだ未熟な院生であるからこそ、教職大学院側のスタッフを増員して、丁寧なサポートをお願いしたい。具体的に言えば、家庭科の免許を持つ院生が授業をするのであれば、実務家教員であれ、研究者であれ、家庭科教育の専門家のスタッフを加えて授業を省察したい。

勿論、専門外のスタッフからのアドバイスも大変貴重で効果はあるが、若い教員の授業力の向上のためには、その教科の専門家との協働研究が不可欠である。院生の教科の授業力の向上のために大学側のスタッフの拡充をお願いしたい。」

どのように院生の教科の指導力を高めるのか。学部生との議論、授業に対して、教職大学院のインターンシップの可能性の一つは、インターン先の先

生方や大学の教員が院生とともに実践と省察を繰り返すことが可能であることだと思います。教員養成をめぐるのは既存の大学院と教職大学院の改革の只中ですが、どのような体制にあっても教科教育を担当する一人として責任と可能性を痛感する提言でした。

なお、研究大会1日目は、実践研究成果公開フォーラムとして8つの大学が発表され、2日目は、

基調講演、パネルディスカッション、教育委員会等連携検討委員会報告、並行してポスター発表が行われました。ポスター発表では福井大学教職大学院生の谷康博さん(敦賀工業高校)も生徒が身近な環境を清掃する取り組みなどについて事前、事後の主体的な活動と共に発表され、高い関心を集め盛会のうちに発表を終えられました。

スクールリーダーだより

高浜町立高浜中学校 / 清常 徹

本校では近年、授業づくりを学校改善の最も重要な柱の一つとして位置づけ、教育実践を積み上げています。今年度も昨年度に引き続き、「学びで『つながる』授業づくり」を研究主題とし、授業研究に力を入れてきました。2学期からはそれに加え、生徒の学力向上をめざした3つの取組を進めました。

1つ目は、教科部会の充実です。本校では週時程の中に教科部会の時間が設定されています。これまでは、教科書の進捗確認や定期テストの検討会、出展作品の選考など事務的な内容に充てられることが多くありましたが、2学期以降は、教材研究や指導案検討に時間をかけることが増えてきました。自主授業公開の計画を立て、教科部会の時間に授業参観をして放課後に事後協議をしている教科もありました。

2つ目は、全国学力・学習状況調査の分析です。分析は養護教諭や学習支援員も含めた全職員で行うこととし、国語科グループ、数学科グループ、質問紙グループのいずれかに全職員が所属しました。分析を通して学力向上について考える研修会を実施し、当日は嶺南教育事務所の全面的なサポートも得て、グループごとに分析をしました。本校の弱点を明らかにした後、その弱点を改善する取組も進めました。質問紙グループでは、目標値を設定し、それに向けて教師の生徒への関わり方を改善し、12月に再度3年生に質問紙を実施することにしました。取組の結果、多くの項目で改善が見られました。国語科と数学科の2グループについては、特に正答率が低かった設問に注目し、その設問に関わる単元で改善授業をすることにしました。数学科は、11月に2年生の「多角形の内角の和」の単元において改善授業の提案が行われました。数学の分析をしたメンバーが授業を参観し、授業研究をしました。国語



タブレットを用いて投球フォームについて話し合う体育の授業

科は「図表と文章を関連づけて正しく内容を理解したり表現したりする力」を伸ばす授業を1月に公開し、授業研究を行いました。弱点に注目した授業研究によって、生徒への指導の中でこれまで足りなかった部分が明らかになり、よりよい指導法を考えることができました。

3つ目は家庭学習の充実です。これまで全職員で家庭学習について深く議論することができておらず、教科担当任せになっていました。また、自ら課した宿題についてやらせきるといった教員の意識も弱かったように思います。家庭との連携も十分とは言えませんでした。家庭で宿題に取り組む生徒の割合が低いという本校の現状を改善するために、現在、全職員で家庭学習の在り方について議論しています。生徒に宿題を課す目的や、量、質について検討したり、家庭学習と学力向上の関連について考えたり、生徒に配付する『学習の手引き』の見直しをしたりしています。

以上、2学期以降に本格的にスタートした本校の学力向上の取組を3つ紹介しました。これらは、おそらくどの学校でも当たり前のように取り組みされて

いることかと思えます。本校では今年度になってから、ようやく上記のような取組に力を注げるようになりました。ここ数年間、本校の学校改善のエネルギーは、学力向上よりも落ち着いた学習環境を整えることに注がれてきました。授業研究にも大きな力を入れてきましたが、「学力向上」というよりもむしろ「授業で生徒指導」という意識が強かったように思います。これまで本校に勤務し尽力くださった多くの先生方のお陰で、現在は落ち着いた学習環境が実現し、学校改善のエネルギーを学力向上に向けてることができるようになってきています。

学校の雰囲気落ち着いたところ、生徒たちの運動面、文化面での活躍も光るようになりました。本校野球部や地域の硬式野球チームが県制覇したのを皮切りに、吹奏楽部が県コンクールで金賞を受賞したり、駅伝競走大会で女子チームが北信越大会に出場したりするなど、次々と輝かしい成績を収めるようになりました。各種作文コンクールにおいても本校生徒の作品が県の代表作品として全国大会に選

出されています。こういった成果は生徒たちの大きな自信につながっています。高いレベルの大会やコンクールで活躍する仲間の姿を間近で見ることで、自分たちもやればできるという思いになり、それが日々の学校生活において前向きな姿勢につながっているようです。

学校改善の取組、とくに生徒指導面での改善の取組というのは、水の中に一つ一つ石を積み上げていくようなものです。どれだけの労力を注いでもなかなか成果が目に見えません。本校はそういった時期を経て、今、石が水面に顔をのぞかせたところです。成果を目で確かめながら教育実践を積み上げていけるところまできました。教員が教科研究や授業づくりに全力を注ぐことができるということが、こんなにも幸せなことなのだ、今、ひしひしと感じています。これからは“学力向上”の石を確実に積み上げ、学校改善にいつそう邁進したいと考えています。

福井県特別支援教育センター／源甲斐 恵美

私が勤務する福井県特別支援教育センターでは、嶺北地区を「福井地区」「丹南地区」「坂井・奥越・吉田地区」の3つに分け、地域や園・学校の実態に合わせてながら、障害のある子どもの保護者や園・学校からの相談に応じる「教育相談」「就学相談」「保護者支援」、特別支援教育を担う教職員の専門性の向上を目指す「研修支援」など現場に密着した業務に取り組んでいます。

今回は、センターが行っている教員研修の一部について紹介したいと思います。表1は、平成26年度のセンターの研修区分です。

私は、特別支援教育新任担当者研修を担当しています。年間5回の研修を通して、特別支援学級の担任教員や通級指導担当教員として必要とされる学級経営、学習指導、児童生徒理解等に関する基礎的事項について研修し、担任教員としての資質および指導力の向上を図っています。

この研修の受講者は65名おり、県内に本年度、特別支援教育に初めてかかわる先生方が多数いることが分かります。

受講者は、大学を卒業したばかりの講師の方から通常学級で20年以上担任をしてこられたベテランの方まで幅広く、また学校の規模や特別支援教育の推進状況も違います。

第1研修では、福井県の特別支援教育についての講義の後、初めて特別支援教育にかかわる先生方が日ごろの思いや悩みを出し合い、活発に意見交換を行います。この意見交換で、同じ悩みや苦しみを感

て頑張っているのだと勇気付けられる先生方が多く、こういった場の必要性を感じています。第2研修では、ベテランの特別支援学級担任の学校を体験校として、授業の様子を実際に参観し、その後、特別支援学級経営のノウハウや授業づくり、個別の教育支援計画の作成等について、研究協議する時間を設けています。第3・第4研修では、特別支援学校のコーディネーターの先生方の協力を得ながら、子どもの見立て、それに合わせた授業について考え、実践する研修となっています。子どもの実態を見極めて、その特性に応じた指導を考えることは、長く教員をされている方でも難しく、この研修の場で、子どもの見方について様々な視点でアドバイスをしてもらったり、他校の実践を聞いたりすることで、新しく子どもの姿をとらえ直す機会になっています。特別支援学校のサポートは研修の場だけで終わらずに、教育相談としてつながっていくケースもあり、地域での連携のきっかけづくりにもなっています。そして最後の第5研修では1年間の取組を振り返りまとめます。

この研修を通して、一人ひとりの先生方の置かれた実情、学校の状況を把握し、思いに寄り添いながら、研修を進めていくことの大切さを実感しました。時には、特別支援学級担任が通常学級の先生方と協働できるように、センター所員が学校組織に働きかけていくことも必要になります。

今後も、特別支援教育センターの役割をしっかりと認識しながら、様々な学校や先生方と協働して、子どもの育ちを支えていきたいと考えています。

表 研修区分

研修名	対象
研修講座（16講座）	特別支援教育に関心のある園や学校の教職員、関係機関の職員
基本研修（初任者・2年目・5年・10年経験者）	特別支援学校該当教員（悉皆）
特別支援教育新任担当者研修	特別支援学級および通級指導を初めて担当する教員
専門研修 ①特別支援教育コーディネーター専門研修 ②授業研究リーダー研修	幼稚園・小・中・高・特別支援学校での授業経験が5年以上あり、今年度研究を推進する役割を担う教員
特別支援教育コーディネーター研修	初めて特別支援教育コーディネーターに指名された教員

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属小学校 山越 翔太

冬季集中講座が明け、自分自身の今までの実践・経験を価値づけることが中心だった期間から、再び“インターンシップ”“課題別実習”に意識を向ける期間になった。とはいえ、経験を経験に止めておくのではなく、それを大学に持ち帰り、他者に語り、様々な意見をもらうことで自分の中に価値づけることができる。

私たちストレートマスターは、毎週木曜日に『コラボレーションホール』にて、「週間カンファレンス」を行っている。午前には「今週の学びの振り返り」「主担企画」、午後には「公教育の課題に基づくプロジェクト学習」「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」を行っている。1月期は特にM2にとっては、『長期実践報告書』の締め切りが迫っているということもあり、「主担企画」や午後の2つのプログラムでは、その報告書を互いに読み合ったり、進捗状況を語り合い、それについての悩みを聴き合ったりしていた。

今回、本稿を執筆するにあたって、キーワードとしたいのが「共感」と「関係」である。特に「学びの振り返り」においては、この2つがカギとなる。基本は、少人数のグループに分かれて、それぞれの振り返りを行うのだが、他者の経験を聴く時、共感的な聴き方が求められることがある。私が1月期に同じグループとなった人の中には、振り返りの時間、涙を流す院生がいた。自分たちが“インターンシップ”をさせていただいている学校での出来事に対し悩んでいるのだ。しかし、聴き手が最初にするのは“どうすればいいのか”といった具体的な解決策を出すことではない。“そうだね～。”この一言である。あるいは、聴きながら頷くだけでもいい。話を聴き、共感の姿勢を示すこと。それだけでも全然違う。

その時だった。話をしていた院生が涙を流し

た。抱えていたものを出すことができ、スッキリしたのだろう。落ち着いてから互いに話を進め、グループに入ってくださっている先生方と一緒に解決策を探し出す。“語りと傾聴”の中で少しずつ進んでいくのである。

悩みの内容を聞いていくと、根本的に様々な「関係」の中で悩んでいることが多いようである。ここで2つ目のキーワード「関係」が出てくるのである。教師と子どもの関係、教師同士の関係など、「今週の学びの振り返り」の中で取り上げられることは多い。特に子どもとの関係づくりは、皆必ず悩むことになる。

私たちストレートマスターが“長期インターンシップ”“課題別実習”で学校現場に行かせていただく時、私たちは紛れもなく「教員免許を持った教師」である。しかし、それと同時に、ここ教職大学院で学んでいる「学生」でもある。「教師」と「学生」、相反する2つの立場の間で、子どもたちとどのように関係を築いていけばいいのか、時々分からなくなることがある。特にM1の院生はこのことによく悩む。私が昨年の今頃に悩んでいたのも“子どもとの関わり方”“子どもとの「関係」の築き方”についてだった。

そんな時に、先輩方に自分の悩みを話し、「そうだね～。」という言葉聞くことで、自分の気が楽になったことを覚えている。その上で、解決策と一緒に考えたり、先輩方からアドバイスを受けたりすることもあった。そんな“語りと傾聴”の中で学び合うのが、この「週間カンファレンス」なのである。

計2年間となる現場での“長期インターンシップ”“課題別実習”もいよいよ佳境となってきた。特に私達M2にとっては、それぞれがそれぞれの道に進んでいくための準備段階である。今までの学びを振り返り、自分がこれからどのように授

業を行っていくのか、子どもたちと関わっていくのか、そのためにクリアしなければならない課題は何か、自分自身と向き合う大切な時期である。『長期実践報告書』の執筆を終えても、それが終わりではない。2年間の実習の中で、現場の先生方の姿を見て、一番に感じたこと、大切だと思ったこと。それが“学び続けること”である。現場の先生方の“学び続ける”姿を見ることで、自分自

身も2年間でそれを行ってきたことで、よりその大切さが伝わってきた。

“様々なつながり”の中で“学び続ける”教師。「様々な」というところには「人」もしっかり含まれている。自分がそうありたいと思う契機となってくださった先生方、そして、本稿を読んでくださった方々に感謝の言葉を述べて、本稿を閉じたいと思う。ありがとうございました。

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校 北川 優佳

年が明け、早1ヶ月が過ぎた。今年度もラストスパート、と同時に来年度に向けたスタート準備の時期である。年末年始に行われた集中講義では、1年目の私たちはインターンシップ報告書（1年目のまとめ）の執筆をした。これまでの実践を振り返り、意味づけ価値づけしながら自分の言葉で残していく作業は教職大学院の醍醐味と言っても過言ではないと思う。この集中講義を経て、1月の週間カンファレンスは執筆中の悩みや葛藤を語り合い、さらに思考を深めていく場となった。今回は、1月の週間カンファレンスを中心に記していきたい。

まず、既知のことかもしれないが、改めて教職大学院生の基本的な日常を紹介したいと思う。教職大学院の1年目ストレートマスターは、拠点校と呼ばれる福井県内の学校で週3日の“長期インターンシップ”を行っている。長期インターンシップでは、授業実践をしたり、授業参観させていただいたり、部活動指導に関わらせていただいたりする。教育実習とは違い、二年間という長期間の実践であるため、学校現場の年間を通した流れの中で力を磨くことができる。また、週1回（木曜日）、各拠点校に散在していた院生が大学に集結し、学年・校種・教科の壁を取り払い、大学教員を含めた小グループで語り合う“週間カンファレンス”がある。ここでは、各拠点校での実践を振り返って価値づけたり教育理論と結びつけたりする。さらに、おおよそ月1回（土曜日）、スクールリーダーの先生方も交えた“合同カンファレンス”や、年2回（6月と3月）の“ラウンドテーブル”、および夏期・冬期集中講座がある。今回、話題の中心となる週間カンファレンスは、①今週の学びの振り返り、②主担当企画、③公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習、④授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究の4部構成である。しかし、時間は区切られていても、先述の通り1月の週間カンファレンスは報告書の執筆に関する語り合いが多く見られた。

1月の主担当企画は、『長期的な実践を他者とともに振り返る』だった。長期的な実践を振り返り、他者と語り合うことで思考を深めるとともに、今後の展望を開いていくのだ。私は学校現場で実践力を養いたい！という想いで教職大学院に進学し、これまでの約10ヶ月間を過ごす中で多くの悩みや葛藤を抱いた。この詳細を記述することは控えるが、ただがむしゃらに、そして誤解を恐れずに言えば流れて身を任せてここまで来た。これを振り返って価値

づけるには相当な労力が必要であるし、独りではおそらく限界がある。教職大学院での実践は、ただ闇雲に行うのではなく、一つひとつの実践の事前準備を丁寧に行い、事後に吟味する。当然、拙い実践しかできないながらも、まずは量をこなすことより一つの実践の質を少しでも高めることを重視するのだ。私自身、授業実践やその他の場での生徒との関わりなどにおいて、ぼんやりしていた自分の軸が少しずつ輪郭を現してきたように感じている。始めは自分のことに精一杯で、なかなか周りを見る余裕すらなかった私だが、少しずつ生徒のニーズを考えられるようになってきた。すなわち、まず自分は理科を通して何をどう伝えたいのか、また生徒は何をどう学びたいのか、そのために私にできる支援は何かと考えるようになった。生徒と同じ目線で共に成長していけるように模索しているところである。上述のような内的変化は無意識に起こる。この内的変化を客観的に認識できたのは、カンファレンスを通して他者と語り合う中で思考が整理され、価値づけられてきたからだと思う。この過程は課題を認識する機会にもなる。そして、認識した課題のクリアを目指して再び思考し、次なる実践へとつなげていくのである。1月の週間カンファレンスは、さらなる飛躍のための絶好の機会であったと私は感じている。

当たり前だが、一朝一夕に力がつくことはない。成長するためには、他者の力を借り、支え合いながら一步一步進んでいくしかないのだ。1年目の私たちにとって、院生生活の折り返し地点は目の前だ。あと一年、教職大学院での学び（≒成長）のサイクルに身を委ね、新たな実践への挑戦と省察を繰り返していきたい。



書評

「生物から見た世界」

ユクスキュル・クリサート 著

日高敏隆・羽田節子 訳

岩波文庫



「生物から見た世界」は1934年に刊行された生物学、動物行動学の古典的名著と評されている書籍である。

冒頭では、マダニの生態が紹介される。マダニのメスは木に登り、下を通りかかる獲物（温血動物）を待ちかまえる。そして、適当な獲物が下を通りかかると、獲物の上に身を投げ、毛の中をはいまわり、温かな血液を吸う。しかし、マダニには目がない。では、どのようにして獲物の到来を知り、血液を吸うのか。マダニは嗅覚によって獲物の接近を知る。哺乳類の酪酸の匂いが、下へ身を投げる際の信号として働くのである。そして、温度感覚と触覚によって毛のない、血液を吸うのに適した場所を見つけ、血液を吸うのである。マダニを取り囲んでいる環境の中で、哺乳類の体から発せられる酪酸のにおいとその体温、そして皮膚の接触刺激、それがマダニの世界を構成している（ダニにとって意味を有する）全てである。そこにきれいな良い香りのする花があったとしても、おいしそうなお菓子があったとしても、それはマダニを動かさない。

客観的に記述されうる、捉えうるとしてしまいがちな環境だが、その中にいるそれぞれの主体（生活体）にとって現実として存在しているのは、“その主体（生活体）にとっての世界”なのだという見方をユクスキュルは私たちに提供する。同じ時空間に生きていたとしても、マダニにとって現実として存在している世界と、私たちにとって現実として存在している世界が異なっているように、生活体はそれぞれに特有の世界を構築しており、客観的な環境と

いうものは存在しないのである。ユクスキュルはこのような、それぞれの主体にとっての世界を“環世界”（Umwelt）と呼んでいる。

ここで、話の主体をマダニから子どもに移してみよう。私たちは私たちの環世界を生きているし、子どもはそれぞれの子どもの環世界を生きている。「子どもを見る」という時、目の前の子どもを知ろうとする時、私たちは“彼らにとって”現実に存在している世界を知ろうとしているだろうか。その上で、自分の環世界と子どもが生きる環世界との接点を探ろうとしているだろうか。

本書では、様々な生物の環世界が紹介されている。コクマルガラス（カラスの一種）にはじっとしているキリギリスがまったく見えない。ヒトデはイタヤガイの天敵であるが、ヒトデがじっとしている限り、貝には何の影響もない。ヒトデが動き出して初めて、ヒトデは貝に天敵として知覚される。ただし、動いている物体の形や色は関係がない。そして、動いている物体の動きがヒトデと同じくらいゆっくりである場合のみ、それは貝に知覚される。同じ景色を見ていているようでも、人間とイヌとハエとでは、見え方が違う。

本書を手に取り、様々な生物たちに“現実”として存在している世界を覗いてみることを通して、“その主体にとっての世界”を見るとはどのようなことなのかをぜひ味わってみてほしい。（笹原未来）

実践し
省察する
コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2015
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001



2015.2.27-3.1

実践研究 福井ラウンドテーブル
2015 spring sessions

Session 0 シンポジウム

知識社会の教師の資本

Teacher Professional Capital in Knowledge Society

アンディー・ハーグリーブス 氏

(ボストンカレッジ教授)

佐藤 学 氏 (学習院大学大学院教授)

秋田 喜代美 氏 (東京大学大学院教授)

2015年2月28日(土)10:30 - 12:00

福井大学文京キャンパス

総合研究棟V(教育系1号館)

大1講義室



Session III / Zone B フォーラム特別企画

東アジア型教師像と教師教育の探求

—上海師範大学の研究と実践から学ぶ—

陸 建非 氏(上海師範大学教授)

郭 偉奇 氏 (上海師範大学教授)

張 進 氏 (上海市教育委員会)

ゲスト 佐藤 学 氏 (学習院大学大学院教授)

2015年2月28日(土)15:30 - 17:30

福井大学文京キャンパス

総合研究棟V(教育系1号館)

6階 コラボレーションホール

Schedule

2/14 Sat. 長期実践研究報告会

2/14 Sat. 宇都宮大学 学校活性化フォーラム

2/27 Fri - 3/1 Sun 実践研究 福井ラウンドテーブル

【編集後記】

1月は一面の雪に覆われ、福井らしさを感じております。2月はまだまだ寒い日が続いておりますが、教職大学院では冬期集中講座や長期実践報告書の執筆を終え、いよいよ年度の結びへと向かっています。今月開催される長期実践報告会ではその集大成が語られ、多様な実践者における新たな省察が生成されていくことだと思っております。また、福井ラウンドテーブルの開催もいよいよ近づいております。今回は国内に留まらず海外からもゲストを迎え、より充実した企画がされています。多くの方にご参加いただけることを期待しております。(藤井佑介)

教職大学院Newsletter No.69

2015.2.14発行

2015.2.14印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dptdfukui@yahoo.co.jp